

猫の犬糸状虫症

猫の犬糸状虫症は犬とは病態が異なり、診断や治療がより難しく、症例報告が少ないのが現状です。そのため、飼い主さんの予防の重要性への理解を得ることに苦労されている先生の声を多く聞きます。今回、犬糸状虫の多数寄生がみられた猫の症例をしもだてどうぶつ病院院長大里 聡先生にご報告いただきます。この症例報告が猫の犬糸状虫症予防啓発の一助となれば幸いです。

猫の犬糸状虫症の1例 大里 聡(しもだてどうぶつ病院:茨城県筑西市)

症例 雑種、雌(未避妊)、推定13歳、体重2.5kg、室内外飼養

初診時(0病日目)

症状

元気および食欲の低下、発熱、軽度の削瘦(BCS2)がみられ、ノミが多数寄生していた。心雑音は認められなかった。

治療・処置

- ・フィプロニル製剤、皮膚滴下投与
 - ・オルピフロキサシン 4mg/kg, SID, 7日間投与
 - ・高たんぱく質・高カロリー特別療法食(a/d)の処方
- 飼い主の希望により検査は行わなかった。

16病日目

症状

元気および食欲は回復していたが、腹囲膨満と体重の増加(体重3.3kg)がみられた。胸水および腹水貯留、呼吸促進がみとめられた。

検査

腫瘍による腹水貯留を疑い、超音波検査を行ったところ、心臓肺血管内への犬糸状虫成虫多数寄生像と(図1)、胸水および腹水がみとめられた。マイクロフィラリア検査は陰性、犬糸状虫抗原検査キットでは陽性の結果であった。

治療・処置

腹腔および胸腔穿刺により腹水約50mL、胸水約250mLを除去した。穿刺液は透明で粘稠性はなく、比重1.014、蛋白濃度は漏出液として基準値範囲内であった。

犬糸状虫成虫駆除療法として犬糸状虫に内部共生するボルバキア駆除のためドキシサイクリンを投与し、新たな犬糸状虫感染の予防と既に体内にいる幼虫を駆除するためセラメクチンを投与した。

- ・ドキシサイクリン 8mg/kg, BID, 8日間投与
- ・セラメクチン製剤、皮膚滴下投与
- ・アラセプリル 2mg/kg, SID, 8日間投与
- ・フロセמיד 2mg/kg, BID, 8日間投与

腹水および胸水除去後の体重は2.9kgであった。

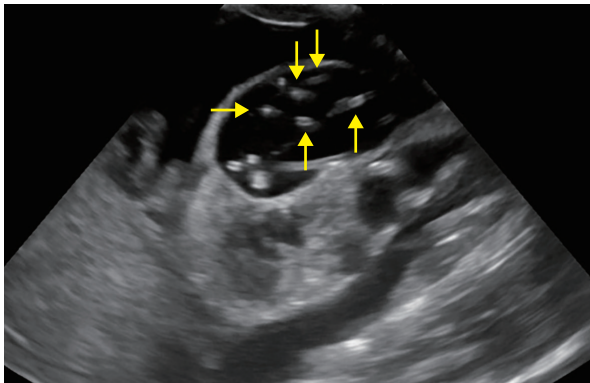


図1. 心臓肺血管内に寄生する成虫が多数みとめられる。

23病日目

症状

前回の治療後、元気は一時的に回復したが、再び低下。体重は2.7kgであった。

検査

血液検査を行ったところ、白血球数の増加が認められ、好中球およびリンパ球、好酸球数の増加が認められた。FIV・FeLV検査は陰性であった。

WBC	49,190 / μ L	HCT	35.2 %
LYM	7,930 / μ L	HGB	10.9 g/dL
NEU	3,8740 / μ L	PLT	268 \times 10 ³ / μ L
EOS	1,710 / μ L	BUN	43 mg/dL
RBC	8.27 \times 10 ⁶ / μ L	CREA	1.3 mg/dL

治療・処置

前回の処方にプレドニゾロンを追加し、治療を行った。

- ・プレドニゾロン 0.5mg/kg, SID, 6日間投与
- ・ドキシサイクリン 8mg/kg, BID, 8日間投与
- ・アラセプリル 2mg/kg, SID, 8日間投与
- ・フロセמיד 2mg/kg, BID, 8日間投与

27病日目

症状

食欲低下症状がみられた。

治療・処置

腹腔および胸腔穿刺により腹水約600mL、胸水約150mLを除去した。他の薬に加えてピモベンダン 0.25mg/kg, BID, 4日間の追加処方をした。腹水および胸水除去後の体重は2.0kgであった。

30病日目

症状

元気、食欲ともに回復していたが、胸水貯留が認められ、体重は2.5kgであった。

治療・処置

胸腔穿刺により胸水約200mLを除去した。穿刺液は乳び様であった。ピモベンダン、プレドニゾロン、アラセプリル、フロセמידを23および27病日目と同量で処方した。

その後、32病日目に死亡した。

最も多くの寄生虫から猫を守る
フィラリア・ノミ・マダニ・お腹の虫の対策はこれ1つでOK



登録商標